

現代英語の変異性

——トク・ピシン、ジャマイカン・クレオールおよび グラスゴー方言の音韻とつづり字の比較 (2) ——

杉本豊久

3. グラスゴー方言

スコットランドの言語事情は複雑で、度重なる異民族による言語接触の歴史をそのまま反映している。その中でもグラスゴーの方言は一般に“Glaswegian Patter”と呼ばれ、特異な存在である。グラスゴーの一般市民が日常使っているこの変種を英語の一方言変種と見做すか、それともスコットランド独自の言語、即ち「スコッツ語 (Scots)」あるいは「スコットランド語 (Scots)」と見做すかについての議論はやや微妙であり、少なくともスコットランドにおける言語史をしばし垣間見る必要がある。

まず7世紀頃、イングランド北東部に住み、古英語のノーサンブリア方言を話していたアングル人が、スコットランド南東部に侵入してきた。当時は、ハイランド地方や島嶼部では先住民族のピクト人やその後アイルランドから侵入してきたスコット人が話すスコットランド・ゲール語が優勢であったが、1066年のノルマン人によるイングランド征服 (Norman Conquest) 以降になると、ローランド地方では、様々な言語接触が繰り返される。上流階級のアングロ・ノルマン人たちはフランス語を話し、その家臣たちはイングランド北部の英語方言を話していた。しかも、その英語方言は、当時この地域がスカンジナビア半島を中心に精力的に活動していたバイキングの一派、デーン人の支配下でもあったため、「古ノルド語 (Old Norse)」との言語接触を受けその影響を受けていたとみられる。

また、当時のスコットランドの各自治都市には、北欧、北海沿岸のヨーロッパ低地地方、フランスなどから商人や職人たちが多数集まってきており、彼らの話す言語との複雑な言語接触があったはずである。つまり、イングランドの北東部

の各地域方言をベースにして、古ノルド語、オランダ語、フランス語、それに北部のスコットランド・ゲール語などが言語接触を起こし、ピジン化やクレオール化を繰り返し、これが古スコッツ語の原型であったと考えられる。このようにして、16世紀まではスコッツ語が自治都市を中心にして「共通語 (lingua franca)」としての役割を果たし、ローランドを中心とした広範な地域で使われていた。

ところが、16世紀初めに印刷技術がスコットランドにもたらされ、当時すでに定着しつつあった Geoffrey Chaucer (1340?-1400)²³⁾の英語を規範とする正書法が浸透し、スコッツ語は書き言葉としての地位を徐々に失うことになる。しかも、John Knox(1514?-72)²⁴⁾らの宗教改革が英語訳聖書でおこなわれたことと、1603年の同君連合²⁵⁾によりジェームズ6世がイングランド王ジェームズ1世となりロンドンに移り、自ら率先して英語による『欽定訳聖書』を編纂したことなどが相俟って、スコットランド・ゲール語はもとよりスコッツ語の使用領域はますます狭められていく。そして、1707年の合邦 (議会合同)²⁶⁾により、スコットランドはローランド地方を中心として、イングランド化が益々進むことになった。

18世紀になって、Allan Ramsay²⁷⁾, Robert Fergusson²⁸⁾, Robert Burns²⁹⁾, Sir Walter Scott³⁰⁾などが文学作品の中でスコッツ語を駆使したが、土着の言葉への共感や懐古主義の傾向が強く、スコッツ語の社会的地位を回復するには至らなかった。さらに、1920年代になって、Hugh MacDiarmid³¹⁾たちによる「スコットランド文芸復興運動」³²⁾が起こり、スコッツ語をスコットランドの政治的・文化的独自性の象徴として掲げようとした。古代スコッツ語をもとに Lallans³³⁾と呼ばれる合成スコッツ語を考案し、スコッツ語による現代文学のジャンルを開拓しようとした。

現在スコットランドの人口の3分の1の人々、約150万人がスコッツ語を話すとされているが、1991年および2001年の国勢調査にはスコッツ語の使用状況についての質問項目が設けられておらず、実際の話者数は不明である。しかし、1985年に「スコットランド国家遺産法 (National Heritage Scotland Act)」³⁴⁾が制定され、スコッツ語の振興策が講じられ、2001年には「地域言語あるいは少数言語のための欧州憲章 (European Charter for Regional or Minority Languages)」³⁵⁾をイ

ギリス政府が批准し、ウェールズ語やスコットランド・ゲール語とともにスコッツ語も保護される言語の対象に含められることとなった。今後、スコッツ語の振興策の検討と実施が注目される。

このようにスコッツ語に焦点を合わせてその歴史を概観してみると、現在スコットランド全域で話されているスコットランド英語とは異なる独自の言語が別個に存在するかのような印象を与えるのだが、すでに述べたようにどちらも古英語を起源としており、両者の間に境界線を引くことはなかなか難しいのが現実だ。語彙や文法が極めて似ているし、言語的特徴という観点からは、英語の一方言といえなくもない。そこで、Aitken (1984) が言うように、スコッツ語とスコットランド英語とを両極に配置した「言語連続体 (language continuum)」を設定し、スコットランドで話されている様々な英語系言語変種をこの連続体のどこかに位置づけるというのが妥当かもしれない。だとすれば、グラスゴー方言もこの中に位置づけられることになる。

3.1. グラスゴー方言の音韻的特徴³⁶⁾とつづり字

- 1) 語尾子音連結<母音+/nt/>および<母音+/rt/>の単純化、つまりこの種の子音連結-/nt/, /-rt/の最終子音/t/が声門閉鎖音/?/で代用されたり、脱落したりする。

senting : /sentɪŋ/⇒/sen[?]n/⇒/sen/, wanting : /wantɪŋ/⇒/wa : ?n/⇒/wā : n/, don't know : /dā[?]no/⇒/dāno/, etc.

この種の特徴は、実は語尾子音連結を回避して、つまり<子音+子音>の配列をさけ、<子音+母音>の配列を作ろうとする傾向の現われかもしれない。というのも、語尾子音連結<母音+/nt/>および<母音+/rt/>の結合形において、語尾の/t/が声門閉鎖音/?/で代用され、さらにその直前の/n/や/r/が脱落して、二段階の単純化がみられたわけだが、その結果として語尾子音連結の配列形態が回避されたともいえるからである。また、このような解釈の妥当性を指示する現象がほかにも見られる。<rl><rm><lm><rn>などの語尾子音連結に見られる「語中音挿入 (epenthesis)」である。これらの語尾子音連結の間に母音を挿

入ることによって子音連結を回避している現象がみられる。例えば、arm, film, girl, torn, などの発音が、それぞれ [ɛɾʌm], [fɪɾʌm], [gɪɾʌt], [tɔɾʌn] となり、子音連結が解消されている。

2) 音素 /l/ が「軟口蓋化 (velarized)」あるいは「母音化 (vocalized)」して、「暗い (dark) /l/ [ɫ]」となり、それがつづり字に反映されることがある。
《語尾》: a' / aa / aw (=all), ara / a-raw (=at all), ba / baw (=ball), etc.

3) 語頭、語中、語尾などにおいて単語の一部 (子音・音節) が脱落する。
dundy money (=redundancy money), um (=him); caunle (=candle), ganda (=grandfather), granma (=grandmother), haud (=hold), hauf (=half), haunbaw (=handball), tumml (=tumble); fun (=found), gaun (=going, go on), etc.

4) 語中、語尾において単語の一部に子音や音節が挿入される。
tumshie (=turnip); twicet (=twice), wanst (=once), etc.

5) 歯間摩擦音 /θ/ 及び /ð/ はそれぞれ /h/ や /d/ で代用されたり、直後の音への同化現象を起こし、それがつづり字に反映されることがある。
/θ/ : anyhin (=anything), everyhin (=everything), hanks (=thanks), hing (=thing), hink (=think), nuhin (=nothing), somhin (=something), etc.
/ð/ : brother [bɹʌɾʌ], faither [feɹɪʒ], mother [mʌɾʌ], that [ɾäʔ], etc.

6) 母音直後の /r/ (Post-vocalic /r/) が発音され、特に母音間では「弾音 (tap) /ɾ/」や「接近音 (approximant) /ɹ/」などになる。
《語尾》: after, air, bar, brammer, for, fur, motor, sure, wur (=our), yer, etc.
《子音直前》: arm, beardie, birlin, first, kerds, mustard, parsley, start, etc.
《母音間》: barra, furrit, horror, in one's baries, morra (=tomorrow), etc.

7) 音素 /w/ と /hw/ の対立があり、それぞれ w と wh でつづられる。

/w/: wa(=wall), wan(=one), wance(=once), wean(=child), wee(=little, small), etc.

/hw/: whae(=who), whaur(=where), whit(=what), whitteerick(=weasel, stoat), etc.

6) 「声門閉鎖音 (glottal stop) [ʔ]」が語尾や語中の母音直前で音素 /t/, /k/, /p/ などの代用として現れる。

at my school [ɛʔ mp·e skʊ·l], getting [gɛʔɛn], gets [gɛʔz], “Know how families get that way.” [nʌ həʔ fe·mɪɛz gɛʔ rəʔ weɪ], “Och, who’re you fuckin talking toz?” [ɔx: y jʏ flʌk^hɛn tʰɔ·ʔkɛn t^hɛ], oot [ʔ], …, right? [rɛɪʔ], “Something that didn’t happen very often.” [sʌmθɛŋ ðɛʔ dɪdnʔ hæ:p^hɛn vɛ·ɪð ɔ:fɛn]

7) ゲール語や古英語の由来する普通名詞や固有名詞の中に、音素 /x/ を含むものがある。

aucht(=eight), bocht(=bought), brocht(=brought), fecht(=to fight), laich/laigh(=low); Bach, Machars, McCulloch, Sassenach, Sauchiehall Street, etc.

8) グラスゴー方言独自の、接尾辞形 <-y>, <-ies> 及び <-er> を用いた単語や句の各種短縮化がみられる。

i) <-y 型> amny(=am not), baldy, bevy(=alcoholic drink or s single drink or a session of drinking), bogey(=a child’s cart), canny(=can’t, cannot), clarty, dizny(=doesn’t, does not), doowally(=an idiot), dunny(=the area below the common stair in a tenement building), emdy(=anybody), eppy(=epileptic fit), evrubdy(=everybody), folly/foley(=fellow), gauny(=going to), hairy, etc.

ii) <-ies 型> backie, baggie, bahookie, beardie, binnie, bonnie, bowfies, Buckie, cattie(=catalogue), chieffie, cludgie, doobie, Home Ekies(=Home Economics), geggie, guties, heidie, hughie, icey/icie(=ice-cream van), etc.

iii) <-er 型> beamer, belter, blooter, bummer, chanter, dauner, dinger, falsers, fizzer, grave-nudger, greaser, jotters, keeker, low-flyer, lumber, ower, patter, peevers, shitters, skitter, wanner,

9) 音素/k/を表すつづり字<k>を多用する。

choklit(=chocolate), dooket(=dovecote), kerry-oot(=take away), praktikly(=practically), skoosh(=squash: any fizzy soft drink'), Suckie(=Sauchiehall Street), yezkin(=you can), yuzkin(=you can), etc.

4. 三変種の比較分析

収集したトク・ピシン、ジャマイカン・クレオール及びグラスゴー方言の音韻(子音・母音)とつづり字の特徴のほぼ全項目とその実例の一部を挙げれば次のとおりである。

1) トク・ピシン³⁷⁾

i) 【子音とつづり字】

a. 「語尾子音連結 (final consonant clusters) の単純化」がつづり字に反映される。

/-st/ : dentis (<dentist) ; /-nt/simen (<cement) ; /-ct/ : distrik (<district) ;
/-nd/ : han (<hand) ; /-ld/ : wel (<wild) ; /-mp/ : bamim (<bamp-im=bump),
etc.

b. 「Post-vocalic /r/⇒φ : Non-Rhotic」がつづり字に反映される。

<子音直前> : epot (<airport), ami (<army), baman (<barman), kas (<cards), etc.

<語尾> : akeselareta (<accelerator), plasta (<adhesive plaster), alta (<altar), etc.

c. 「音(節)の脱落(語頭・語中・語尾)」がつづり字に反映される。

<語頭の音素・音節> : pret (<afraid), gen (<again), long (<along), lait (<

bright), etc.

<語中の音素・音節> : apinum (<afternoon=evening(early)>), asde (<yesterday>), etc.

<語尾の音素・音節> : bel (<belly>), orait (<all right>), golo (<globe>), etc.

- d. 「摩擦音/破擦音 (/z, sh, ts, tʃ, dz/⇒/s/ : <s, xh, sh, ts, ch, tch, g, dg>⇒<s>)」 : 摩擦音 (fricative) ・ 破擦音 (affricate) 系の音素 /z, sh, ts, tʃ, dz/ は一貫して「無声歯茎摩擦音 (voiceless alveolar fricative)」 /s/ に集約され、づづり字 <s> で表示される。これは、トク・ピシンの大きな特徴であり、これらの音素の多様なつづり字 <s, xh, sh, ts, ch, tch, g, dg> が <s> に集約されるわけであるから、まさに子音体系の「単純化」現象といえ、そこにトク・ピシンの持つ「合理性」が伺える。

/z/ : isi (<easy>), eksosopaip (<exhaust pipe>); /sh/ : buksop (<bookshop>); /ts/ : boskru (<boat's crew>); /tʃ/ : masis (<matches>), bros (<brooch>); /dz/ : ensel (<angel>), kabis (<cabbage>), bris (<bridge>), ensin (<engine>), jas (<judge>), etc.

- e. 「有声閉止音 (stop), 破裂音 (plosive) ⇒ 無声音化 (/d/ <d> ⇒ /t/ <t>, /g/ <g> ⇒ /k/ <k>)」 が つづり字に反映される。

/d/ ⇒ /t/ : bet (<bed>), blut (<blood>), bret (<bread>), klaut (<cloud>), etc.

/g/ ⇒ /k/ : bek (<bag>), pik (<pig>), welpik (<wild pig>), koan! (<go on!>), kirap/sanap (<get up / sun up=get up>), etc. cf. beng (<bank>), dring (<drink(n.)>), etc.

- f. 「唇音 (labial) /f/ ⇒ /p/、/p/ ⇒ /v/、/v/ ⇒ /r/」 などが つづり字に反映される。

・ /f/ ⇒ /p/ : <p>

pret (<afraid>), apinun (<afternoon>), paitim (<fight>), bipo (<before>), etc.

・ /p/ ⇒ /v/ : <v>

halivim / halpim (<help>)

・ /v/ ⇒ /r/ : <r>

karamapim (<cover up=cover)

g. 「側音 (lateral) /l/⇒母音化 (vocalization) ⇒ ϕ 」

belo (<bell), orait (<all right), hap (<half), hapkas (<half-cast), etc.

h. 「有声・後部齒莖・半母音 (voiced postalveolar semivowel) /r/⇒有性・齒莖・側音 (voiced alveolar lateral) /l/」

<r>⇒<l>

laplap (<wrap wrap=colth), tulait (<too bright=very bright), lait (<bright), etc.

i. 「無聲・齒・摩擦音 (voiceless dental fricative) / θ /⇒無聲・齒莖・閉止音 (voiceless alveolar stop) /t/, 有聲・齒・摩擦音 (voiced dental fricative) / δ / ⇒<d, r, t/ : <th>⇒<t: d, r, s, t>

/ θ /⇒<t/ : <th>⇒<t>

katolik (<catholic), saut (<South), ting / tingting (<think), etc.

/ δ /⇒<d, r, t/ : <th>⇒<d, r, s, t>

<d> : hidden (<heathen) ; <r> : narapela (<anotherpela), arasait (<other side) ; <s> : klos (<clothes) ; <t> : ating (<either), brata (<brother), etc.

j. 「同化 (assimilation)」

mambu (<bamboo), blackbokis (<black box=flying fox) ; wara (<water), sarap (<shut up), etc.

ii) 【母音とつづり字】

a. 「二重母音 (diphthong) ⇒長單母音」

/ei/⇒<e/ : de (<day), gre (<grey), haiwe (<highway), etc.

/ou/⇒<o/ : gro (<grow), bot (<boat), kot (<coat), etc.

b. 「音(節)の挿入: 母音・子音・音節」

<母音>: kilogiram (<kilogram), golo (<globe), giram (<gram), etc.

<子音>: hama (<hammer), harim (<hear), haisapim (<high up=hoist, lift up), etc.

<音節>: bulmakau (<bull cow=beef), hangamapim (<hang (something) up), etc.

iii) 【つづり字全般の特徴】

a. 「単純化(文字数の減少・脱落)」

<二重字⇒単字>

address>adres, battery>bateru, bill>bil, cabbage>cabis, carrot>karet, funnyman>paniman, coffee>kopi; afternoon>apinun, brooch>bros, green>grin; anchor>anka, chopsticks>sopstik, cock(=penis)>kok, enough>inap, gnat>natnat, etc.

<三重字⇒二重字、単字>

door>dua, interviewer>intaviua, four>foa, gearbox>giabokis, beer>bia, here>hia; heart>hat, colour>kala, airport>epot, before>bipo, fare>fe, picture>piksa, etc.

<語尾<e>の脱落>

brake>brek, course>kos, disciple>disaipel, exhaust pipe>eksospaip, file>fail, grease>gris, hope>hop, house>haus, inside>insait, June>Jun, etc.

<黙字の脱落>

comb>kom, eight>et, exhaust>eksos, fasten>fasim, hour>aua, island>ailan, etc.

b. 「実際の発音に忠実」

April>Epril, because>bikos, behind>bihain, brown>braun, butter>bata, canoe>kanu, cup>kap, driver>draiva, dust>das, east>es, eye>ai, five>faiv/ faipela, flower>plaua, councilor>kaunsila, law>lo, nice>nais, round>

raun, etc.

c. 「音節・語彙の反復」

<音節の反復>

ananas(=pineapple), bombom/bumbum(=coconut frond), dukduk(=ritual costume representing a spirit), singsing(<sing+sing=concert), susu(=breast, milk), tultul(=consul), toktok wantaim(<tok+tok+one+time=converse with), etc.

<語彙の反復>

glas bilong lukluk(<glass belong look look=mirror), kaikai(<food), kaikaim(<food=bite), kainkain(<kind kind=all sort of, various kinds of), kawawar(=ginger), waswas(<wash wash=bathe, shwr(n.), wash,), wilwil(<wheel wheel=bicycle), etc.

d. 「<c, ch, ck, g>⇒<k>」

<ch>: Kristen(<Christian), krismas(<Christmas), skul(<school), anka(<anchor), etc.

<ck>: aisblok(<iceblock), baksait(<backside=rear), bek(<back), bekbun(<backborne), jek(<jack), kilok(<clock), kok(<cock=penis), kik(<kick), etc.

<c>: kros(<cross=angry), kapten(<captain), bisket(<biscuit), kabis(<cabbage), kek(<cake), kalenda(<calendar), kamera(<camera), etc.

e. 「<f, v>⇒<p>」

• /f/⇒/p/ : <p>

pret(<afraid), apinun(<afternoon), paitim(<fight), bipo(<before), bilip(im)(<believe), paniman(<funnyman, clown), hakisip(<handkerchief), etc.

• /p/⇒/v/ : <v>

halivim / halpim (<help)

· /v/⇒/r/ : <r>

karamapim (<cover up=cover)

f. 「<d>⇒<t>、<g>⇒<k>」

· /d/⇒/t/ : <t>

bet (<bed), blut (<blood), bret (<bread), rot (<road), klaut (<cloud),
etc.

· /g/⇒/k/ : <k>

bek (<bag), pik (<pig), welpik (<wild pig), koan! (<go on!), etc.

cf. beng (<bank), kirap / sanap (<get up / sun up=get up), etc.

g. 「<s, xh, sh, ts, ch, tch, g, dg>⇒<s>」、 「<c, ch, tch, g, dg, t, ts>⇒<s>」

<s, xh, sh, ts, ch, tch, g, dg>⇒<s> :

isi (<easy), eksosopaip (<exhaust pipe); buksop (<bookshop), boskru (<boat's crew); masis (<matches), bros (<brooch), senis (<changes (smallmoney)), sas (<charge), kisen (<kitchen), hakisip (<handkerchief), haus piksa (<house picture=cinema), ensel (<angel), kabis (<cabbage), bris (<bridge), ensin (<engine), jas (<judge), etc.

<c, ch, tch, g, dg, t, ts>⇒<s> :

simen (<cement), sigaret (<cigarette), kaunsila (<councilor), Desemba (<December); sen (=chain), sekim (=check), sis (=chees); kisen (<kitchen); ensin (<engine); kokonas (<coconut), haus piksa (<house picture=cinema), piksa (<picture=film (movie show); boskru (<boat's crew), etc.

i. 「<l>⇒(母音化) ⇒φ」

belo (<bell), orait (<all right), hap (<half), hapkas (<half-cast), hapim (<halve), etc.

j. 「<th>⇒<t, s, r, d>」

brata (<brother>); klos (<clothes>); arasait (<other side>), hidden (<heathen>), etc.

k. 「<x>⇒<ks, kis>」

akis (<axe>), piksim (<fix>), giabokis (<gearbox>), seks (<sex>), bokis ais, etc.

l. 「<y>⇒<i>」

bodi (<body>), boi (<boy>), boipre (<boyfriend>), baim (<buy>), karim (<carry>), etc.

2) ジャマイカン・クレオール³⁸⁾

i) 【子音とつづり字】

a. 「無声・歯・摩擦音 (voiceless dental fricative) /θ/ ⇒ 無声・歯茎・閉止音 (voiceless alveolar stop) /t/, 有声・歯・摩擦音 (voiced dental fricative) /ð/ ⇒ 有声・歯茎・閉止音 (voiced alveolar stop) /d/」

/θ/: authority (<authority>), boat (<both>), breat (<breath>), chute (<truth>), etc.

/ð/: ada/ada (<other>), aldoah (<although>), altogeder (<altogether>), etc.

b. 「語頭の/h/⇒脱落 (φ)」

aaspital (=aspital <hospital>), affi (=haffi <have to>), ammasi (<have mercy>), etc.

c. 「子音交換」

aks (=axe, ax <ask>), cerfitikit (<certificate>), espido (<episode>), felicity (<facility>), etc.

d. 「有声・軟口蓋・鼻音 (voiced velar nasal) /ŋ/ ⇒ 有声・歯茎・鼻音 (voiced

alveolar nasal) /n/」

ascawdin(=ascordin<according), bein(<being), building(<building), etc.

e. 「有声・歯茎・側音 (voiced alveolar lateral) /l/、有声・歯茎・閉止音 (voiced alveolar stop) /d/⇒母音化(vocalization)・脱落(elision) ⇒ ϕ 」
awrite(<all right), azways(<always), bendung(<bend down), foo / fu(<fool), etc.

f. 「有声・唇歯・摩擦音 (voiced labio-dental fricative) /v/⇒有声・両唇・閉止音 (voiced bilabial stop) /b/」
bender(=vender<vendor), bex(<vex), bexation(<vexation), bickle(<victual), etc.

g. 「無声・歯茎・閉止音 (voiceless alveolar stop) /t/⇒無声・軟口蓋・閉止音 (voiceless velar stop) /k/、有声・歯茎・閉止音 (voiced alveolar stop) /d/⇒有声・軟口蓋・閉止音 (voiced velar stop) /g/」
bokkle/bokl(<bottle), genkly(<gently); cangle(<candle), hangle(<handle), etc.

h. 「/t, tr, st/⇒無声・後部歯茎・破擦音 (voiceless postalveolar affricate) /tʃ/, 有声・後部歯茎・破擦音 (voiced postalveolar affricate) /dʒ/」
chigga/jigga(<trigger), chobble(<trouble), Choosday(<Tuesday), chowe(<throw), chu(<true), chuck(<truck), chune(<tune), chupid(<stupid), chute(<truth), etc.

i. 「有声・歯茎・側音 (voiced alveolar lateral) /l/⇒有声・後部歯茎・半母音 (voiced postalveolar semivowel) /r/(母音化)」
direc(<dialect), etc.

j. 「音素(子音)の挿入」

bunks (< bounce), bwaile/bwile (< boil), cyar/cyaar (< car), deestant/destant (< decent), fambilly/fambly (< family), foolynish (< foolish), gyaabige (< garbage), etc.

k. 「Post-vocalic /r/⇒ϕ : Non-Rhotic」

afta (< after), anda (=unda < under), baak (< bark), fahda (< father), cawd (< cord), etc.

l. 「語尾子音連結の単純化 (Simplification of final consonant clusters) : 無声音化・簡略化・脱落」

adap (< adapt), an (< and), baddis (=badis < baddest), bans (< bands), bris (< brisk), etc.

ii) 【母音とつづり字】

- a. 「閉口・低舌・後方舌・円唇・母音 (close low back rounded vowel) /o:/、閉口・中高舌・後方舌・円唇・母音 (close mid back rounded vowel) /ɔ:/ ⇒ 開口・低舌・中央舌・非円唇・母音 (low open central unrounded vowel) /a(:) /
aala/alla (< all of), aas/haas (< horse), aaspital/aspital (< hospital), Actoba (< October), Ahgus (< August), aaf (=arff < off), aringe (=arinj < orange), etc.

b. 「短母音 (short vowel) ⇒ 長母音 (long vowel)」

aal (< all), ..., eee?/..., eeh? (< ..., isn't it?), een/eena/ eenai (< in), haas (< horse), etc.

c. 「二重母音 (diphthong) ⇒ 長単母音 (long vowel)」

aringe (< arrange), assin (< assign), brohn (< brown), champong (< champion), etc.

d. 「同化 (assimilation)」

ammasi (<have mercy), azways (<always), bimma/bimmah/bimmer (<BMW), dandimite/dandomite (<dynamite), gimme (<give me), grievance (<grievance), etc.

e. 「音 (節) の脱落 (elision of morpheme (syllable)) : 語頭 (initial) ・ 語中 (middle) ・ 語尾 (final)」

boat/boht/bout (<about), ca (=caa=becca =becawsen <because), ceitful (<deceitful), coo/cu/ku (<look), cooyah /cuyah (<look here, look you), fraid (<afraid), gains/genes (<against); Febry (<February); braa/bra/brer (<brother), doah/doan (<don't), wooda (=woulda <would have), haffi (<have to), etc.

iii) 【つづり字全般の特徴】

a. 「発音に忠実なつづり字法 (Orthography faithful to actual sounds)」

areddy (=areddy=arredi <already), bisnes/bisnis (<business), Crismus (<Christmas), cyaa dweet (<can't do it), cyabage (<cabbage), det (<debt), diffrant (<different), donki (<donkey), ediat (<ediot), edication (<education), enuf (<enough), etc.

b. 「独自の造語 (original coinage)」

appricilove (<appreci+ate (=hate) ⇒ appreci+love), fashionist, facialist, fretration, frightenation (=fright), fraidness (<afraid+ness=fear), etc.

c. 「形態の反復 (repetition of syllables, words or phrases)」

back back (=turn upside down), bada bada (<bother too much, annoy), bangarang (=noise, fuss), bata bata (=batter repeatedly), begibegi (=begibegiman=begger), deh deh (=there is~), dibby-dibby, diffrant diffrant (=various), one one (=all alone), etc.

3) グラスゴー方言³⁹⁾

i) 【子音とつづり字】

- a. 「無声・硬口蓋・摩擦音 (voiceless palatal fricative) /x/」 (21頁参照)
- b. 「有声・両唇・半母音 (voiced bilabial semivowel) /w/と/hw/の対立」 (21頁参照)
- c. 「Post-vocalic /r/ : Rhotic」 (20～21頁参照)
- d. 「有声・歯茎・側音 (voiced alveolar lateral) /l/⇒母音化 (vocalized)」 (20頁参照)
- e. 「無声・歯・摩擦音 (voiceless dental fricative) /θ/⇒無声・声門・摩擦音 (voiceless glottal fricative) /h/、有声・歯・摩擦音 (voiced dental fricative) /ð/⇒/d/、有声・後部歯茎・半母音 (voiced postalveolar semivowel) /r/」 (20頁参照)
- f. 「無声・歯茎・閉止音 (voiceless alveolar stop) /t/, 無声・軟口蓋・閉止音 (voiceless velar stop) /k/, 無声・両唇・閉止音 (voiceless bilabial stop) /p/ ⇒声門閉鎖音 (glottal stop) /ʔ/」 (21頁参照)
- g. 「語尾子音連結の単純化 (Simplification of final consonant clusters) : 無声音化・簡略化・脱落」 (19～20頁参照)
- h. 「無声・歯茎・閉止音 (voiceless alveolar stop) /t/⇒「弾音 (tap) /ɾ/」
little, getting, fightin, nothing, sittin, written, pattern, attitude, butter get away,
a bit of, it is, get it, etc.

i. 「音（節）の脱落 (elision of morpheme (syllable)) : 語頭 (initial) ・ 語中 (middle) ・ 語尾 (final)」

Um (=him), dundy money (=redundancy money) ; caunle (=candle), granma (=grandmother), ganda (=grandfather), tumble (=tumble), haunbaw (=handball), hauf (=half), haud (=hold) ; fun (=found), gaun (=going, go on), granda (=grandfather), granma (=grandmother), grun (=ground), wae (=wall), getting (=getting), wi (=with), bree (=brother), etc.

j. 「音素（子音）の挿入」

tumshie (=turnip) ; twicet (=twice), wanst (=once), etc.

ii) 【母音】

a. 「/ɪ/⇒/ʌ/」 : 音素/ɪ/が下方 (lowered) かつ後方化 (retracted) し/ʌ/に近くなる。

b. 「/u/⇒/ɒ/」 : 音素/u/が前方 (fronted) かつ下方化 (lowered) し/ɒ/に近くなる。

c. 「短母音⇒長母音」 : 強勢のある母音はすべて母音延長が見られる。

d. 「二重母音/ɛi/」 : 始点がより中央寄りとなる。

e. 「/ai/⇒/ae/、/ɛi/」 : 長音環境では/ae/、短音環境では/ɛi/となる。

iii) 【つづり字全般の特徴】

a. 「<c, ch, g>⇒<k>」

choklit (=chocolate), yuzkin (=you can), yezkin (=you can), praktikly (=practically) Suckie (=Sauchiehall Street), skoosh (=squash : 'any fizzy soft drink'), kerry-oot (=take away), dooket (=dovecote), etc.

b. 「<es, s>⇒<z>」

walliz(=wallies : 'false teeth'), cawz(=caws : 'sweeps'), palz(=pals : 'friends'),
ez(=he's), shizz(=she's), bristulz(=bristols : 'titties'), tottiz(=totties :
'potatoes') dizny(=doesn't), yeez(=yous : plural of you), etc.

c. 「<o, ou>⇒<u>」

unuff(=enough), nuhin(=nothing), murra(=mother), furra(=for), luvli(=
lovely), dug(=dog), etc.

d. 「<ui, i, a>⇒<u>」

buld(=build), durty(=dirty), luvin(=living), thurd(=third), wull(=will), etc.

e. 「<-ed>⇒<-t>」

hurtit(=hurted), beltit(=belted), wastit(=wasted), fitit(=fitted), startit(=
started), teltit(=told), knittit(=knitted), bee-heidit(=bee-headed), heart-roastit
(=heart-roasted), kilt(=killed), corrie-fistit(=corrie-fisted : 'left-handed'), etc.

f. 「単純化：文字の減少・脱落」

Um(=him), dundy money(=redundancy money); caunle(=candle), granma(=
grandmother), grun(=ground), wae(=wall), getting(=getting), wi(=with),
bree(=brother), etc.

g. 「子音字の挿入」

tumshie(=turnip); twicet(=twice), wanst(=once), etc.

h. 「独自の短縮形：<-y>、<-ies>、<-er>」(21~22頁参照)

本稿では、この中から三変種あるいは二変種に共通して見られるものを選び出し、相互の比較分析を試みた。まず、三変種に共通する特徴としては、「語尾子

音連結の単純化」(19～20頁及び30頁参照)、「/l/の母音化・脱落」(20頁、24頁及び30頁参照)、「音(節)の脱落」(20頁、23頁及び31頁参照)、「音(節)の挿入」(20頁、25頁及び30頁参照)、「<th>の異音」(20頁、24頁及び28頁参照)などが挙げられる。これらの特徴は、ピジン・クレオール系および英語方言系共にみられるものであり、その意味において長期的言語接触を通して得られる普遍の特徴といえるかもしれない。ただし、「<th>の異音」についてはグラスゴー方言では異音の種類が他の二変種とはやや異なる(20頁参照)。

次に、ジャマイカン・クレオール及びトク・ピシンの二変種には共通だが、グラスゴー方言とは異なる特徴としては、「Post-vocalic /r/ (Rhotic/Non-Rhotic)」、「/w/と/hw/の対立」、「Glottal Stop」、「/x/」。「反復表現」、「独自の短縮形(<y>, <-ies>, <-er>)」などがある。これらの特徴は、いわゆるピジン・クレオール系に共通して見られるが、英語方言形には見られないか、あるいはそれらとは異なるものであり、両者独自の特徴といえるかもしれない。

さらに、トク・ピシンとグラスゴー方言に共通して顕著に見られる特徴として、「つづり字<k>の多用」がある。この特徴はジャマイカン・クレオールにも見られないことはないが、他の二変種ほどには顕著ではない。

以上の比較分析をまとめると次の表のようになる。

〈トク・ピシン〉×〈ジャマイカン・クレオール〉×〈グラスゴー方言〉

1) 語尾子音連結の単純化	○	○	○
2) /l/の母音化・脱落	○	○	○
3) 音(節)の脱落	○	○	○
4) 音(節)の挿入	○	○	○
5) <th>の異音	○	○	△
6) Post-vocalic /r/ (Rhotic/Non-Rhotic)	△(N-R)	△(N-R)	○(R)
7) /w/と/hw/の対立	△(/w/)	△(/w/)	○(/hw/)
8) Glottal Stop	×	×	○
9) /x/	×	×	○

10) 反復表現	○	○	×
11) 独自の短縮形 (<-y>, <-ies>, <-er>)	×	×	○
12) <k>の多用	○	△	○

このように3つの変種それぞれの具体的特徴を抽出し、比較分析することにより、個々の変種を別々に記述しただけでは見えてこなかった、それぞれの各特徴の歴史的あるいは普遍的な特徴の位置づけが可能になる。また、上述の二変種あるいは三変種に共通する諸特徴から外れたものの中に、3つの変種それぞれ独自の特徴が潜在しているということにもなる。そして、そこから、これら3つの変種を音声で入力した際に、あるいは文字として入力した際に、それぞれの印象を形作る音韻及びつづり字の本質的特徴を特定することも可能となろう。

6. おわりに

グラスゴー方言のつづり字法の大きな特徴として、音素/k/を表すつづり字<k>の多用がある。この特徴は、実は他の英語方言にもみられる特徴でもある。例えば、人名の Chris を Kris と表記することがある。この Kris というつづりは通常の Chris に比べてこの表記を見たり、読んだりする者にとってよりショッキングな効果を持つ。つまり、「通常とは異なる」というシンボリカルな意味を持つことになる。これは見方を変えれば、書き手側の自己主張であり、他のものとは異なるという「独自性」の主張とも解釈できる。

このつづり字法が、さらに「従来のつづり字法の慣習に対する抵抗(resistance)」としての社会的意味をもつこともある。例えば、Sebba (2007: 4) が指摘しているように、スペインのカタロニア地方の山岳地帯の町 Ripoll での落書き okupacion (<ocupacion=coccupation 「不法占拠」) は、「伝統的なつづり字法に対する抵抗」が「伝統的な社会的慣習に対する抵抗」という社会的意味を持っていることを示している。(杉本: 2009 b, 84)

パプア・ニューギニアのトク・ピシンにも同様の特徴がつづり字にみられる。

Kristen (=Christian), Kriskas (=Christmas), skul (=school), anka (=anchor), bek (=back), baksait (=backside: 'rear'), kilok (=clock), kok (=cock: 'penis'), などがそうである。もっとも、トク・ピシンにみられるこのような特徴にカタロニア地方でのスペイン語に見られるような社会的意味があるかどうかはやや疑問ではあるが、従来の(標準英語の)慣習にとらわれることなく、あくまで実際の発音に忠実なつづり字を志向するというトク・ピシン全体に見られるつづり字の特徴の一環として捕らえてよいだろう。ジャマイカン・クレオールにもこの種のつづり字<k>の用法がないわけではないが、トク・ピシンやグラスゴー方言に見られるほどの頻度と限定的な用法は見られない。つまり、<k>も使われるが、<c><ch><ch>なども同様に高い頻度で使われており、この点で、両者とは異なる。このような相違点の調査・分析が今後の課題ではある。

◎本研究は成城大学特別研究助成金「現代英語の合理性と普遍性に関する実証的研究」の助成を受けており、ここに記して謝意を表する。

【付記】

枚数に制限があったため、本稿を二つに分け、前半を「現代英語の変異性—トク・ピシン、ジャマイカン・クレオールおよびグラスゴー方言の音韻とつづり字の比較(1) —」とし、『成城大学共通教育論集』(第1号 59-79頁)に掲載した。本稿の内容はその後半にあたる。

注

- 23) Geoffrey Chaucer (1340?-1400) はイングランドの詩人。当時の教会用語であったラテン語や、当時イングランドを支配していたノルマン人貴族の言葉であったフランス語を使わず、世俗の言葉と見做されていた中世英語を使って物語や詩を執筆した最初の文人とも考えられていることから、「英詩の父」とか「英語の父」などと呼ばれる。代表作として、『トロイラスとクリセイデ (*Troilus and Criseyde*)』(1385)、『カンタベリー物語 (*Canterbury Tales*)』(1387-1400) などがある。
- 24) John Knox (1514-72) はスコットランドの宗教改革者であり、ジョージ・ウィシャートの影響を受けスコットランド教会の改革に着手。ジョネーブでジャン・カルヴァンに学び、改革派神学と長老制の体験と知識を得た後、スコットランドに帰還し、

カトリック派の女王メアリー・スチュアートの治世下で、プロテスタント宗教改革の指導者として活躍。1560年にスコットランド長老派教会を設立した。

- 25) 1603年に、スコットランド王ジェームズ6世が、イングランド王ジェームズ1世として即位した。これ以後、1707年にグレート・ブリテン王国に統合されるまで、同一の君主がイングランド王とスコットランド王をかねる体制が続いた。
- 26) 1603年の同君連合以来、同じ君主を冠してきたものの、別々の王国であったイングランド王国とスコットランド王国が、1707年の「連合法（合同法）(Act of Union)」によって合邦し（スコットランド議会は閉鎖され事実上廃止となった）、グレート・ブリテン王国が成立した。この合邦は形式的には対等とされていたが、新国家の議会や王宮など主要な機関は旧イングランド王国に属しており、イングランドによる不公平なスコットランド併合とも考えられる。ちなみに、1998年のスコットランド法の制定により、1999年にスコットランド議会は再開され、一定範囲で所得税を変更できるほか、スコットランド法でウェストミンスター議会保留事項と規定されている事柄（外交、軍事、財政・金融、麻薬取り締まり、移民の規制など）以外について、独自の法令を成立させることが出来る。これまでに、福祉政策や狐狩り規制、公共施設内での禁煙などについて、スコットランド独自の法令が施行されている。
- 27) Allan Ramsay (1686-1758) は、詩選集『エバー・グリーン (*The Ever Green*)』(1724) で古スコッツ語による中世スコットランドの近代詩やバラッドを集めたものを紹介し、自らもスコッツ語で詩作した。代表作は牧歌劇『気高い羊飼い (*The Gentle Shepherd*)』(1725)。1707年の連合法 (Act of Union) により、英語がスコットランドの公式の言語となると、スコットランド啓蒙時代の知識人たちは英語による啓蒙を進めるが、これに対する反動として Ramsay たちはスコッツ語による詩や歌を積極的に創作し、スコットランド人の愛国心をかきたて、18世紀における国民文学の復興に貢献した。
- 28) Robert Fergusson (1750-74) は土地のことばであるスコッツ語による詩作に固有の価値を見出し、特定の地域の方言ではなく、独自の合成したスコッツ語を用いた。スコッツ語による詩作は、すでに、Allan Ramsay (1686-1758) が実践していたので、彼から韻律などの詩の形式の多くを学んだと思われる。代表作は風刺精神とユーモア感覚溢れた「オールド・リーキー (*Auld Reekie*)」で彼自身「オールド・リーキーの桂冠詩人 (the laureate of Auld Reekie)」と称される。「蜂に寄せて (*To the Bee*)」や「ゴシキヒワに寄せて (*To the Gowspink*)」などの田園風景への思いを歌った牧歌的作品などは、ロバート・バーンズに大きな影響を与えた。
- 29) Robert Burns (1759-96) はスコットランドの伝統的詩作法とスコッツ語を駆使して多くの詩作をしたスコットランドを代表する国民詩人。1月25日の誕生日には記念行事「バーンズ・ナイト」が世界各地で催される。「蛍の光」の原詩「オールド・ラング・ザイン (*Auld Lang Syne*)」は彼の代表作の一つ。代表作「シャンター村のタム (*Tam o'Shanter*)」(1790) はエリスランドで小作人としての農業経営に従事していたときに書かれたものである。
- 30) Sir Walter Scott (1771-1832) は18世紀から19世紀初頭にかけてのロマン主義の時

代に、全盛期のロバート・バーンズの影響を受け継ぎつつ、スコットランドやその文化・文学がその存在感を増した時期に、人気詩人バイロン (Lord Byron) と共に頂点を極めた詩人・歴史小説家。古い伝説や美しい口承バラッドの豊富なイングランドとのボーダー地方に育ち、エディンバラ大学に法律を学び、法廷弁護士の資格を得る。1799-1832までセルカーク州の治安判事を勤め、この町の裁判所で無難に職務をこなしていた。代表作は、『ウェイバリー (*Waverley*)』(1814), 『ロブ・ロイ (*Rob Roy*)』(1917), 『アイバンホー (*Ivanhoe*)』(1820), 『ケニルワース (*Kenilworth*)』(1921) など。

- 31) Hugh MacDiarmid (1892-1979) の本名は Christopher Murray Grieve。エディンバラで小学校教師、スコットランドやウェールズでジャーナリズム活動をした。第一次世界大戦中、衛生隊の軍曹として参戦。戦後はモントローズに住み、町会議員や治安判事を勤める。この間に文学雑誌の編集や詩作。代表作は『酔いどれ男アザミを見つめて (*A Drunk Man Looks at the Thistle*)』(1926)。1920年代に「スコットランド文芸復興運動 (Scottish Renaissance)」を主導し、スコッツ語をスコットランドの政治的・文化的独自性の象徴として掲げ、自身で考案した「合成スコッツ語 (Synthetic Scots)」である「ラランズ (Lallans)」による現代文学のジャンルを開拓した。
- 32) 「スコットランド文芸復興 (Scottish Literary Renaissance)」: 1920年代から30年代にかけて盛んになった文学における新しい動きを指す。狭い意味では、スコッツ語を用いた特定の詩人たちの活動を指すが、広い意味ではスコットランド全体の再定義に関与したこの時期の文学活動全般を指す。この運動を実質的に主導したのは Hugh MacDiarmid (1892-1979) であり、文芸誌を創刊して、スコッツ語による詩を紹介したり、合成スコッツ語による新しいスコッツ語の詩作を通してその再生と普及に努めると同時にスコットランドの文学伝統の新たな定義を試みた。
- 33) Lallans: 18世紀にスコッツ語を教養のない粗野な言葉とみなす傾向が強まる中で、Allan Ramsay, Robert Fergusson, Robert Burns などにより、土着のことばへの共感を呼び起こす詩が発表され、散文では Sir Walter Scott が作品の会話体にスコッツ語を用いたりしたが、その社会的地位を回復するには不十分であった。このような状況を打破しようと、Hugh MacDiarmid がスコッツ語の古語から、合成スコッツ語を考案し、これが Lallans と称された。スコッツ語の使用を推進しようとする姿勢が、現在のスコッツ語関連団体に受け継がれている。
- 34) 「スコットランド国家遺産法 (National Heritage Scotland Act)」はスコットランド文化の伝統を継承・発展させる目的で1985年に制定された法律で、これにより各方面からスコッツ語の振興策が助成されてきた。
- 35) 「地域言語あるいは少数言語のための欧州憲章 (European Charter for Regional or Minority Languages)」: 2001年にイギリス政府がこれを批准したことにより、ウェールズ語、スコットランド・ゲール語などとともにスコッツ語も保護される言語の対象に含められることとなった。スコットランド議会 (Scottish Parliament: 1998年のスコットランド分権法により、1707年の議会合同以来、292年ぶりにスコットランド議会在が再開した) が主導し、特に教育・文芸などの分野で広範にわたる振興策が検討・

実施されている。

- 36) 以下に紹介するグラスゴー方言の言語的特徴の中には、杉本（2007：123-139）の一部を再分類し、修正・加筆したものが含まれている。
- 37) 各特徴の実例と詳細は、杉本（2008）、（2008）を参照のこと。
- 38) 各特徴の実例と詳細は、杉本（2008b）を参照のこと。
- 39) 各特徴の実例と詳細は、杉本（2006）、（2007）、（2008）を参照のこと。

参考文献

- Aitken, A.J. 1984. 'Scots and English in Scotland'. In P. Trudgill (ed.), *Language in the British Isles*. Cambridge: CUP, 94-114.
- Arends, Jacques, Pieter Muysken and Norval Smith. eds. 1995. *Pidgins and Creoles: An Introduction*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Chowning, A. 1977. *An Introduction to the Peoples and Cultures of Melanesia*. Manlo Park, California: Cummings.
- Davies, Diane. 2005. *Varieties of Modern English: An Introduction*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Foley, William A. 1986. *The Papuan Languages of New Guinea*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gorlach, Manfred. 1991. *Englishes: Studies in Varieties of English 1984-1988. Varieties of English Around the World*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Hall, Robert A. 1954. *Hands Off Pidgin English!* Sydney: Pacific Publications PTY. Ltd.
- . 1966. *Pidgin and Creole Languages*. Ithaca: Cornell University Press.
- Hancock, Ian F. ed. 1985. *Diversity and Development in English-Related Creoles*. Ann Arbor: Karoma Publishers, Inc.
- Holm, John. 1989. *Pidgins and Creoles Vol. II Reference Survey*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2000. *An Introduction to Pidgins and Creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Macafee, Caroline. 1983. *Varieties of English Around the World: Glasgow*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Macaulay, R.K.S. 1977. *Language, Social Class, and Education: A Glasgow Study*. Edinburgh:
- Miller, J. (1999) 'Scots: a sociolinguistic perspective.' In L. Niven and R. Jackson *The Scots Language: Its Place in Education*. Dumfries: Watergaw.
- Mosel, U. (1981) "Tolai and Tok Pisin: The Influence of the Substratum on Development of New Guinea Pidgin." *Pacific Linguistics* B73
- Mühlhäusler, P. 1977a. "The History of New Guinea Pidgin." *Pacific Linguistics* C40: 497-510.
- . 1977b. "Sociolect in New Guinea Pidgin." *Pacific Linguistics* C40: 559-66

- . 1979. "Growth and Structure of the Lexicon of New Guinea Pidgin." *Pacific Linguistics*, C52. 199ff. Canberra: Australian National University, Research School of Pacific Studies, Department of Linguistics.
- Mühlhäusler, P. and T. Dutton. 1979. "Papuan Pidgin English and and Hiri Motu". In Wurn (ed) 1979. 209-223
- Mühlhäusler, P. 1982. "Tok Pisin in Papua New Guinea". In Bailey and Goralch (eds) 1982: 439-466
- Munro, Michael. 1985. *The Patter: A Guide to Current Glasgow Usage*. Glasgow: Glasgow District Libraries.
- . 1988. *The Patter: Another Blast*. Edinburgh: Canongate Publishing Limited.
- . 2001. *The Complete Patter*. Edinburgh: Birlinn Limited.
- Romaine, S. 1982. 'The English Language in Scotland'. In R.W. Bailey and M.Goralch (eds) 1982. *English as a World Language*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press, 56-83
- Sebba, Mark. 2007. *Spelling and Society: The Culture and Politics of Orthography around the World*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, Larry E. and Michael L. Forman. 1997. *World Englishes 2000. Literary Studies East and West*. Honolulu: University of Hawai'i.
- Wells, J.C. 1982. *Accents of English*, vols I-III. Cambridge: Cambridge University Press.
- 池田雅之、矢野安剛編 (2006) 『ヨーロッパ世界のことばと文化』成文堂。
- 河原俊昭、山本忠行編 (2004) 『多言語社会がやってきた』くろしお出版。
- 杉本豊久 (1985) 「ピジンとは何か、クレオールとは何か」『言語』Vol.14, No.11 大修館書店、40-44頁。
- . (1992) 「接触言語の変容(Ⅱ) —ジャマイカン・イングリッシュのライフサイクル—」『成城文藝』第138号、20-33頁。
- . (2001) 「爆発する英語: グローバル英語の時代」『英語教育』Vol.50, No.2 大修館書店、11-13頁。
- . (2006) 「スコットランドにおける言語事情とグラスゴウのゲール語教育」『成城文藝』第196号、83-147頁。
- . (2007) 「グラスゴウ方言—その音韻・つづり字法・語彙—」『成城文藝』第200号、119-154頁。
- . (2008a) 「Tok Pisinのつづり字法・語彙・句表現—その単純化と合理性—」『成城モノグラフ』第40号、117-193頁。
- . (2008b) 「世界のピジン・クレオール英語—言語接触の諸相—」矢野安剛・池田雅之編『英語世界のことばと文化』成文堂 263-285頁。
- . (2008c) 「スコットランドの言語事情とグラスゴウ方言」矢野安剛・池田雅之編『英語世界のことばと文化』成文堂 207-230頁。
- . (2009a) 「現代英語の変異性—トク・ピシン、ジャマイカン・クレオールおよびグラスゴウ方言の音韻とつづり字の比較—(1)」『成城大学共通教育論集』第1号

59-79頁。

———. (2009b) 「日英語の変異性—英語変種をつづり字表記と日本語カタカナ表記の比較分析—」『成城文藝』第208号、83-117頁。

森本幸代 (2006) 『バトワ単語帖』 Mighty Mules' Bookstore